

# 佑啓

ゆうけい

発行所  
社会福祉法人 佑啓会  
理事長 里見 吉英  
〒280-0265  
千葉県市原市今富 1110-1  
TEL 0436-26-7611  
FAX 0436-26-7612  
編集者 広報委員会

## 「生きる」と

里見 吉英



「人生は、その長短ではなく、生ある時にいかに人間らしく、その人らしく、充実した生活を送るかが大事なことと思う」選訳的医療という言葉を聞いたある講演会での講師の言葉であり、議論されている制限的医療の問題を絡めた発言でした。

講師が重症心身障害児の医療を専門とする医師で、パワポイントを使用した数々の事例(殆どが二十歳以下の若い人生)をとりあげながらの発表であつたため会場のあちこちからすすり泣きが聞こえて来るような重苦しい内容もありました。

人生それぞれとは言うもののこの世に生を受けたと同時に医療の世界につきあひながらの人生を想っても、本人のみでなく、一家族の心情は到底はかり知ることのできない世界です。

五十七才になる学会の利用者Aさんが亡くなったのは本年のお正月が明けて間もなくでした。起床後フラフラすると職員に訴えた後に昏睡状態に陥り、救急車で病院に搬送されました。

手術が必要なので親族を呼ぶよう指示され、連絡を受けて病院に駆けつけたのが保護者

代わりのお兄様でした。「手術をしますか。もし助かったとしても身体は元には戻らずよくても車イスの生活でしょう。どうしますか？」確認する担当医にすぐに「お願いします」と答えたそうです。

その後手術は成功し、とりあえず一命は取り止めたものの意識は戻らず寝たきりの状態が続きました。

数日後お兄様が今後のことについて相談に見えたときのこと、突然涙を流しながら「先生、あの時何も考えずに手術を承諾したけれど、彼にとって本当に良かったのだろうか、今まで障害があるために本人も我々も苦労してきた。この先本人も我々もまた違った苦勞を背負わなければならぬと思うと...。やっとなつて本人も楽しく我々兄弟も安心していただくには相談を受けた職員は返す言葉もなかったらどうです。

Aさんは、結婚もされていまして。社会の目を気にした親の意向が強かった結婚のようでしたが、その妻の突然死や精神的疾患での入退院、職場での不適応等いろいろなきことがあつたようです。彼が生まれ育った昭和二十年代は、軽度知的障害の場合、障害自体が社会に認められ

ていた訳ではなく、こういった問題には家族が対応してきた時代です。「障害を持って生まれたが故に社会にうまく適応できなかった。我々家族をも含め、誰にもそのことを理解してもらえずにストレスが生じて不適応行動が出ていたのかもしれない」とお兄様が漏らした言葉に真実があるのかもしれない。

そんな彼の支援に疲れ、市役所に相談に行き、措置として入所されました。



現在の入所施設の大半は、知的障害者の保護を目的とした行政処分(措置)として運営されてきた経緯があります。しかし、支援費制度、障害者自立支援法が制定されたことにより、国や行政機関の責任が明確になつたことは否めず、施設の役割もサービスなのか保護なのか根本的な理念さえも揺らいでしまつてい

入所に至る理由は、親無き後の生活を危惧、家族の保護能力の問題、指導訓練への期待等様々ですが、いずれにしても、一義的には保護を目的とした意味合いが強く、このことは今も昔も変わらない状況にあると言えます。

施設入所者の地域移行に関しては、今に叫ばれたことではなく、これまで、その必要性に応じて進めてきた施設もありま

す。ところがグループホームやケアホーム、ホームヘルプサービスなど、使える資源が乏しかつたことに加え、アフターケアシステムの脆弱さなどの理由により、その動きは広がってきませんでした。

しかし、現在では十分とは言えませんが、地域生活を支えるための相談機関やサービスも増えつつあります。これらの資源をうまく活用することによって入所施設を利用しなくても地域で生活することができるようになると思われま

入所施設の中には、障害特性に熟知した経験豊富な職員がおり、複雑な背景の方や処遇困難ケースにも取り組み、状態の改善に導いた成功事例等も持ち合わせているところもあるでしょう。そのノウハウを活かすことで、地域生活移行が可能になる人も増えてくると思われま

入所施設を見ずして入所施設を否定するのと同じように、地域を見ずして始めから地域生活を否定しては、物事の本質は見えてきません。制度が変わつたことでわかりにくくなつた知的障害者入所施設の本質、変えてはいけ

えてきたように思います。

制度や仕組みが変わることに伴い、支援の具体的手法はその変化にあわせて随時変わっていくでしょう。しかし「常にベターな暮らしを模索する」という私たちの基本的姿勢は不変です。より多くの方が、より良い暮らしを実現できるよう今後も施設運営を続けていきたいと思

二ヶ月後、周囲の祈りも虚しくAさんは静かに息をひきとりました。「理事長、ふる里学会と出会うことが本当によかつた。それまで福祉の世界を全く知らず本人をいろいろな形で振り回してしまつたと思う。持病の糖尿病も悪化せずソフトボールやボウリングを楽しみにしていました。今まで行つたことのないようなところにもいろいろ連れて行ってもらつた。本人は帰省しているときよりも学会のほうが生き生きしていた。人生の中で本当に充実していた期間だったと思います。」 合掌

(理事長)

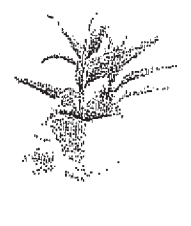
入所施設を見ずして入所施設を否定するのと同じように、地域を見ずして始めから地域生活を否定しては、物事の本質は見えてきません。制度が変わつたことでわかりにくくなつた知的障害者入所施設の本質、変えてはいけ

「グループホーム・ケアホーム」建設及び開設が困難に「」  
今までは、社会福祉法人は、市街化調整区域や農地においても建築の規制を除外される特典がありましたが、昨年の十一月に都市計画法が一部改正となり、社会福祉法人においても建築物を建設する際には許可制となりました。このことは、国が障害者施設に於いて入院・入所施設からの地域移行を促進するためにグループホーム・ケアホームを増加させるという狙いにブレキをかける法改正となつています。現在、政策委員会でも厚労省にまた千葉県にも確認中ですが関係する改正点を記載します。(後続)

都市計画法第三四条第一号の適用基準  
都市計画法第三四条第一号に規定する建築物の建築の用に供する目的で行なう開発行為又は建築行為若しくは用途変更で、申請の内容が第一項又は第二項に該当するものとする。  
1 市街化調整区域における、主として当該開発区域の周辺の地域に居住している者の利用に供する公益上必要な自己の業務の用に供する建築物で、次の各号のいずれにも該当するものとする。

(1) イ 社会福祉法(昭和二十六年法律第四五号)第二条に規定する社会福祉事業の用に供する施設のうち、福祉サービスを受ける利用者又は入所者が直接利用する施設  
(2) 申請地は、次のアからカに掲げるものであること。  
ア 市街化調整区域において五〇戸以上の建築物が連たんしている既存建築内の建築物の敷地から百メートル以内にある土地であること。

許可には地域のニーズが必要で、グループホーム・ケアホームの入居希望者のうち入居定員の二分の一以上が当該開発区域の周辺の地域において居住している者を入居させなくてはならない、等の規制もあるようです。



# 就業家族からのお便り

内山 茂樹

ふる里学舎の皆様には息子の就職、その後のフォローなど種々ご支援いただき大変感謝申し上げます。  
今回「就業した家族としての現在の素直な気持ちを機関紙に」とのご依頼がありましたので、つたない内容ですが文章にまとめたさせていただきます。

三人兄弟の二番目として育った息子は、気持ちの優しい子でしたが、親の目からこのままでは一人て生活していくには少し心配だと思っていました。ちょうど私の転勤で山口県にて一緒に生活していた時に、アルバイトをしていた居酒屋の経営者から「いまだき珍しい素直で、まじめな子だ。面談を見させて欲しい。」との話があり、専門学校を卒業後、そのまま山口県で就職をして、我々家族は転勤で千葉の自宅に戻ってきました。それが今から七年半前のことです。

その間何回か高額商品を買っただけで、その支払いで経営者の方に迷惑をかけたっていました。経営者の方も何とか息子を一人前にしようとする努力をしてくださった。その時も本当にありがたかったです。その時とばかりに感謝の気持ちを一杯でした。

「近くにいると親も子供も甘えがでて一人前になかなかなれない。他人に教えられるとそれだけ一人前に育つてくれるのではないかな」と思っていた息子を、千葉に戻ってきたのでした。今考えると、親としてその時期本当に子供と向き合っていなかったのかも知れないと思っています。

そして、今から二年前に突然、居酒屋を辞めてスナックのボーイとして就職することになったと、その話を経営者から伺いました。

このままではいけないとその日に息子を連れて帰ることを決断して、私は山口に出かけました。開けばローン会社に借金をしては夜の街で遊んでいるとのこと。夜遅くまで遊んでいるので翌朝の居酒屋の仕込みに遅れる、気が入らず経営者に怒られ、自ら辞めたとのことでした。息子に千葉に連れて帰る旨を話したら、素直に一緒に帰ると言いましたので、即日山口を引上げてきました。ちょうど母(息子からは祖母)が亡くなる直前でしたので奇縁を感じます。

連れ帰った後しばらくは母の葬儀のことでバタバタして息子と向き合う時間がなかったのですが、しばらくするとローン会社など複数のところから借金返済の催促が息子に届いていました。総計すると百万円を超える額でした。毎月手取りが五万円程度しかなかった本人に返せるあてのない金額でした。

私も夫婦も愕然とし、いいようがありませんでした。一人にしていた五年間、息子と向き合っていなかった結果でした。



その後、千葉で就職口を探しました。時には就職でなくという嘘を隠すために、深夜帰宅しないこともありました。銀行に振り込みがないのを不審に思われ就職先を確認すると面接で不採用だったとのこと。結局就職はしていませんでした。

これらのこともあり、親としてこれからはどんなふうな息子に接していけばいいか限界を感じていましたので、専門家のコンサルを息子と我々夫婦で受けました。その時のアドバイスを「息子は療育手帳があるという方を前に今後、生活を考えていくことが必要だ」とわかりました。

一人暮らしをさせて甘えを捨てて、厳しく育てることで一人前になっていくと考えていたのは大きな間違えであり、もっと早く気がついてやれば良かったのだと反省していました。親の責任放棄だったのだと思います。

幸いその後、役所の方や専門家の方に相談して、障害者手帳も取得できましたし、ふる里学舎にも一昨年末にお世話になりました。息子には進学では等身大の仲間と丁寧な接して下さる職員の方々の中で、心を開き、明るく変わっていくのがよくわかりました。



また、パン工房の作業の中で自信をつけてステップアップしたいと前向きな気持ちも芽生えてきて、ようやく自分の居場所を見つけたようでした。しかし、いずれ一人て生きていくために自立をさせていくことが親の責任との思いもあり、チャンスがあれば就職を」とお願いしていました。幸いにして昨年の秋、イトーヨーカ堂に就職することが出来ました。しかし、最初は息子の障害を上司の方に十分理解してもらえず、職場の配置転換の話も上りました。その際には支援ワーカーの方に間に入ってもらいました。その結果、職場のご支援も得られ、周囲の方にも認められることで本人も仕事に對しての取り組みも変わってききました。

現在、食品売場の冷凍食品担当の仕事をしてます。冷凍庫への出入りも頻繁にあるようで、寒冷え麻痺がでるなど大変な思いもしているとは思いますが、一年近く遅刻することなく正社員になりたいとの思いで一生懸命頑張っています。夫婦の勝手な思いで、息子を見ていたことを反省し、これから多くの人のお力をいただけて社会人として立ち立っていくよう

にと思っています。息子にとって、自分の居場所の一つが今でも「ふる里学舎」のようです。皆様には引き続きご支援を賜りますようお願いいたします。稿を締めくくりにしたいと思います。

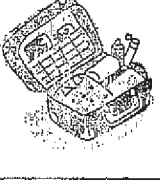
(内山 元樹 父)

## イタリア旅行を終えて

石井 由紀子

拝令交付式の時、看護士の御園さんと共に、理事長より急に名前を呼ばれ「なんだらう」と思ったから、旅行のプレゼントをいただいたこととなり、思ってもいなかったことなのでびっくりしたと同時に二人で大喜びでした。

私達がふる里学舎にお世話になったのは、平成五年の開所当初からなので、十六年目になります。振り返ってみると近頃になり、笑ったり、怒ったり、あつという間のことでした。また、少しいが私自身を成長させてもらった様に思っています。

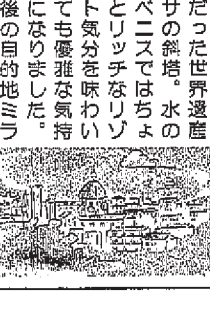


田空港を往復。身一つで海外旅行に出発できるなんて便利な世の中になったものです。このイタリア旅行は、三十数年前学生だった頃友達と一緒に映画館で観た「ローマの休日」が頭の中に浮かび、スクリーンの中の場所に行ってみたくて思っていたので感謝です。

イタリア・ローマまで直行便で十二時間四十分、映画を五本観てもまだ着かないほど遠いところでした。ローマの印象は暖かい空気が、そうない空、気温は三十四度位ありますが、日本と違い湿度がな



二日目は市内観光が始まり、まず世界で一番小さな国・バチカン市国の美術館の見学でした。中世の石の建築物のスケールの大きさに自分を見失いました。その時代に製作された絵画などの貴重な品、色彩豊かな絵画がところせましく並べられていました。まるでその時代にタイムスリップしたように錯覚してしまうほどです。



「岩だっだ世界遺産」ビザの錯覚。水の都ベニスではちょっとリッチなリゾート気分を味わいつつも優雅な気持ちになり、最後、目的地ミラノでは「最後の晩餐」を鑑賞し、心が洗われるような気がしました。

この「ゆたっだイタリア八日間」のツアーは、世界遺産を巡る旅だったことあり、一日一万五千歩、平均十キロ程歩いたので体力を必要とした旅でしたが、うれしいことに三キロ歩きました。一緒に参加した方は皆六十〜七十歳の中高生の方で足取りも軽く生き生きとして人生を楽しんでいるようでした。私も人生を楽しみながら送って行きたいなと思います。日頃の忙しさの中から一時でも異文化に触れ、自分を振り返る機会を頂けしことにより、身も心もリフレッシュすることができたように思います。

(栄養士)

予報通り暑かったこの夏。オリンピックで気持ちまで熱くなり、イルダウするのが大変です。ところで、今夏は暑さに加え突然のスクールに雷鳴。「ギリラ」で定着してしまつたようです。やはり地球温暖化が影響しているの

九月を迎え、朝晩は幾分しのぎやすくなってきましたが、残暑は厳しい予報が出ています。みなさん、遅れてくるといわれている夏ばてにはくれぐれもお気を付け下さい。

宮崎 理